

松本千代榮先生の舞踊学へのご貢献

片岡 康子

はじめに

昨年9月15日、102歳で大往生された千代榮先生。『女子体育』（冬号）に追悼文を書かせて頂き、また、没後ほぼ1年となる今年8月19日には、（公社）日本女子体育連盟主催「松本千代榮先生追悼企画」において、ご縁の深かった現役年長者として基調講演を担当させて頂きました。いずれも「偉業は寿命を超えて道標となる」と題して、18歳での出会いからの64年を振り返り、先生の偉大さに思いを致す刻となりました。

戦前からの既成作品派戸倉ハル先生、戦後創作ダンスを標榜された千代榮先生。恩師・戸倉先生は「あなたはあなたの道を行きなさい」と言って、自分とは全く異なる創作を提案する千代榮先生を独立させてくださったと伺いました。私もお茶大赴任後は「あなたはひとりでやりなさい」と言われて、千代榮先生の研究グループからフリーの位置に居ることになりました。とはいえ戸倉先生対松本先生ほどに舞踊観が異なっていたわけではなく、時に並走、時に交わり、日本女子体育連盟・AJDF神戸・舞踊学会等に関わって、共に歩ませて頂きました。

舞踊学会創設

1969年3月、大学院修士課程修了直後、市川雅さんが主催する「20世紀舞踊の会」に参加しました。その頃、市川さんは舞踊学会創設を考えていらして、会員になる可能性がある方々の名簿を整理したいということで、芸術関係、教育関係をそれぞれ分担しました。そして、1年余、市川さんは100名近い名前が連なる名簿を持って、郡司正勝先生に舞踊学会会長になってくださることをお願いされたのでした。もちろん、その場には千代榮先生も同席。やがて、舞踊学会創設（1975・12）となりました。初代事務局はお茶大に置かれ、若い学会だからと年2回の学会大会を5回開催した後に『舞踊学』創刊（1978）。各地での学会大会と終了後の懇親会での交流は、舞踊学会の発展を感じさせる熱い時間でした。

1994年、千代榮先生が舞踊学会会長に就任され、私は副会長として伴走させて頂きました。先生はすぐに、舞踊学会創立20周年記念「われわれの時代にとって舞踊とは何か」と題する記念誌発行を提案され、過去20年を振り返り未来を展望する3巻を上梓されました（『舞踊学』増刊号、1999-

2000）。舞踊学会を次世代に繋ぐリーダーシップを発揮された20周年記念誌を、今、開いて見ますと、千代榮先生がご自分の研究を舞踊学という学問にすることに力を注いでこられた年月が重なります。

舞踊学の位置づけ

千代榮先生は東京教育大学（現・筑波大学）に日本初の舞踊学講座（学部1963・修士課程1964）を創られ、私は舞踊学修士第1号となりました。千代榮先生の研究は文理融合型ともいえるご研究で、フィールドワークでの映像資料収集・動作解析を手掛けられ、八丈島、宮内庁雅楽、春日大社の舞楽など各地での収集にお供をさせて頂きました。さらに、東教大附属小の相場了先生とタッグを組んだ授業研究や国際会議のレクデモ「学校ダンスの歩み」等を手掛けられ、舞踊学の可能性を拓いてくださいました。

1971年、お茶大に赴任されてからは「舞踊教育学専攻（1973、修士課程）、そして全学規模の博士課程設置（1977）に伴い比較舞踊学を担当され、行政的にも舞踊学を位置づけられたのでした。長年のご研究の全ては、『ダンスの教育学』（全10巻、1992）、『松本千代榮撰集』（全5巻、2008）、『松本千代榮撰集第2期』（全3巻、2010）に収められました。米寿の出版記念会での凜としたお着物姿は、今でも目に焼き付いております。

92歳で車椅子生活になられてからは、有川いずみさんが常にお傍に付き添い、書道も続けられながら日々穏やかに過ごされ、お茶大、筑波大、関東学連の舞台などを巡って大学生を激励されました。奈良女子大附属小に始まり、創り出す喜びを育て続けてこられた優しい眼差しがいつもそこにありました。千代榮先生の原点でした。

おわりに

松本千代榮の名を冠した賞は、舞踊学会紀要『舞踊学』（公社）日本女子体育連盟JAPEW賞、少人数の大学生コンクール「ART. M in トヤマ」に設けられており、お名前のご偉業と共に語り継がれることでしょう。千代榮先生、長年に渡りご薫陶を賜り、誠にありがとうございました。

註：戸籍上は千代榮。千代榮とされている著作名は、そのままとした。